
ファンタジーの詩

七島 希意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーの詩

【Nコード】

N5880J

【作者名】

七島 希意

【あらすじ】

毎日にあきていた高校2年の月中 龍華は、ファンタジーの世界に憧れを抱いていた・・・

― 現実 ― (前書き)

現実とファンタジーの融合!?

「と、なるから・・・」

「ふうー。」

時間は午後。

月中 龍華（男）

高校2年。

ちなみに、現在5月。

は、授業中、空を見ていた。

「晴れか……。」

先生の話に耳も傾けないで、つぶやいた。

飽きた。

自分。

何したいんだろ。

毎日に。

わからなくなる。

自分が。

何も起きない日常。

飽きたな。

――

「今日はじいまで。」

「ん・・・？」

気づいたら寝ていた。

しかも、午後の2時間続けて寝ていた。

「何やってんだ・・・オレ。」

カタッ

カバンを手にとって

席を立った。

基本、帰宅部。

中学生までサッカー部だったので、運動神経は、いいほう。

教室を出ようとする龍華にクラスの男子生徒が呼び止めた。

「龍華！今日フリー？だったらさあ。試合の助っ人してくんない？
たりねーの。」

「練習試合だろ？1年入れとけよ。オレ、帰るから。」

「はぁー？お前いねーと勝てないっつうの。って、おい！龍華ぁ！」

目の前にいた龍華は、すでに話をシカトして教室には、いなかった。

――――

「ふうー。」

昔からファンタジー系のゲームが好きでよくやっていた。

その、世界にあこがれていたりして。

でも、現実はずまらない。

何にも起きない。

何もおこさずともしないんだ。

でも、これからの人生を変えることが、今あるなんて、おもいもし
てないだろう。

―自分とモンスターと不思議な少女―（前書き）

前は中途半端で終わってすみませんでした・・・。

「自分とモンスターと不思議な少女」

ビュンッッッッ!

突然、目の前をなにか黒い物体が通った。

「な!?!何だ!?!」

これは、夢か・・・?

目をこすった。

現実だ。

目の前。すぐ。

黒い。しっぽ。とんがってる。

な、な、な。

見たことねえ。

小学校の時よく見ていた。生き物図鑑にも載ってなかった。

変な汗が流れてきた。

じりりじりりぞび

変な物体は、猛スピードで逃げていった。

昔のゲーマー魂がうずく。

まず、追え。

それが、兄からの教えだ。

その先には、きっと何かあるから。まず、追っべし！……！

ダ
ッ
ッ
ッ
ッ
ッ

走
り
出
し
た
。

何
か
、
あ
る
気
が
し
て
。

相手は、猛スピード。

こっちも全力。

全力で走ったのは、何年ぶりだろうか・・・。

「まてっ！モンスター！」

もはや誰にも止められない勢い。

だが、その直後止まる。

目の前に小柄な少女が飛び出してきた。

「まぢっ！？止まんない。」

そのまま突っ込んでった。

とっさに、少女を抱きしめた。

守るつもりで。

バンツッ！

ズザザザザア

アスファルトの道の上に転がった。

「ふっふん……」

ジンジン痛む。

幸いどこも折れていないみたいだ。

「あれっ!?!いなくなってる・・・どこだ!?!」

気がつくと、自分の腕の中にいたはずの女の子がいなくなってる。

の少女は、モンスターと向かいあっていた。

「いったい、なにがおきているんだあ!？」

―少女の詩―

少女は、首に提げている、クロス（十字架）がモチーフのシルバー
アクセサリーを手に握った。

その瞬間、まばゆい光が辺り一面に広がる。

目を開けていられない。

目を開けると・・・

少女の手には、自分の背を余裕で超える大きなクロスが握られていた。

そのクロスの先端には大げさすぎる大きなベルがついていて、

そのベルが

りりりん

と歌った。

「さあ、このアイドル、リリーがあなたを封印する事を嬉しく思っ
てねッ。聴きなさい。これが私の詩。」

どこからともなく、曲が流れ出した。

その曲は、優しくて、悲しくて、暖かい。

望霊の動きが止まって涙が流れ出した。

少女は、クロスをトンツと地面についた。

ベルが

りりりん

と歌う。

そしてクロスを中心に波紋が広がった。

望霊が光を放った。

望霊は封印された。

「任務かんりよー・・・か。」

少女は、バッグからマイク付きヘッドホンを取り出した。

色は、ピンク。耳にあてる部分は、ハート型。マイクもハートのラブリートイストのやつ。

「ロッドも、もっしとへへ。」

~~~~~>

「~~~~~>」



<-----!>

「わかってるっての、ロッド、お父さんみたいなんだもん。そーゆ  
うの好きじゃないなあ。」

<-----!>

「はいはい。上司ね。りょーかい。今後も望霊は、そっちに送るか  
ら。よろしくね。望霊ちゃん達。」

<----->

「はいはい。じゃーね。」

ヘッドホンをバッグの中に入れた。

そして、後ろを向いた。

「……っ!?!?」

ぱっちり目が合う。

しばしの沈黙が続いたが、少女が口を開いた。

「あなた・・・誰？」

単刀直入に聞いてきた。

「オレは・・・南皇子学園2年の月中つきなか 龍華りゅうかだけど。」

普通は、人の名前を聞くときは、まず自分からう！  
つてのが、常識だけど今、言ったら少女の機嫌を損ねそうなので今  
回はスルー！。

「そつ。私は、サント・プリシペ世界局・望霊保護機関に所属している、メルヘン・ドゥーバルト・ザ・リーリ。」

「めるへん？ディバルト？ダ、リーリ？」

「色々と違つツ！リーリでいいわよツ！みんなそつ呼んでるから。」

「リーリ。」

「よしツ！」

リーリは、大きくうなづいた。

「ウツンぶわっものは・・・」

「ん？…望みのしやっ？」

「うん。」

「それは……ひみつ。」

「ええツツツツ！？」

リリーは、しばらく考えるふりをして、

「うーん。簡単にいえば、”望みを持っている霊”かなあ？」

「はっ？…っ？」

「そのうち教えてあげる。もう決めたから。」

「決めたって何を・・・？」

少女は笑った。かわいらしく。きれいに。

「じゃーね。・・・きつとまた会つことになつことなる。」

少女は、おおきなクロスを地面につけた。

ト  
ミ

その瞬間、少女は消えていた。

はじめて会ったのにこんなにも親しく話せるなんて思わなかった。

「リーリ・・・か。」

胸がどきどきしました。

わくわくする。

自分は、ファンタジーを見てしまった。

望霊。

ひどく不思議でラブリーすぎる、少女<sup>リリ</sup>。

大きなクロスに上げすぎる大きなベル。

これが、オレのファンタジーへの入り口だったんだ……。



―不思議の転校生―（前書き）

遅れてしまってすみませんッ！

「ただでさえ一行短けーし。行がえ多いのにふざけんよ。」

と、言わずに……。

お願いします……。

―不思議の転校生―

――

昨日の夜は、ぜんぜん眠れなかった。

「ふあー。」

だから眠い。

今日は特に何も無い。

暇だ————

「おはよー。龍華。」

「あっ？あぁ。おはよ。」

ふと、時計を見ると8時53分ギリギリの時間。

カタ

席についた。

すると、さっきあいさつした男子生徒がやってきた。

「龍華、知ってるか？」

「何を？」

「転校生。」



苦笑いをうかべた。

(リーリ・・・だよな。てか、高2!?!無理ありすぎたる・・・。)

まもなくして、先生が教室に入ってきた。

「えーと。今日は転校生を紹介したいと思います。」

先生がおなじみの言葉を言った。

「入って。」

転校生の姿がかすかに見えた。

ごくり。

入ってきた少女は、誰もが目を惹かれ、ため息の出るような光を放った少女だった。

この学校のものではないピンクと白を基調とした、制服がよく似合っている。

「リリー……。」

じぶちくゆつに、言った。

「リリーってだれだ？」

前に座ってる男子生徒が話しかけてきた。

「えっ、あ、いや。何でもない。」

「そうか？夢でも見てたか？」

「は？オレだっていつも寝てるわけじゃねー。」

「オレが見るといつも寝てるぞ。龍華。」

「あ？見てんのかよ。いつも。」

「オレは、龍華が好きだからな。」

「は？やめる。オレは、そんな趣味ねー。」

「冗談だって。まぢで。ひくなつての。」



「ごらー。そこ。話さない。」

先生の声が、教室に響いた。

「すみません。」

「ふうー。まったく。じゃあ、自己紹介して?」

「はい。幻空梨吏げんくうりしです。みんなッ!よろしくねー!」

「梨吏ちゃん。かわいいーね。オレと、付き合わない?てか、付き合  
って?」

「おいッ！川田。梨吏ちゃん、口説くなよ。」

梨吏は、自分を口説いた生徒ににこりと笑った。

「私の席どこですか？」

ザ・シカト！！！！

「一番後ろの席よ。」

「わかりました。」

「オレの隣カよッ！？」

そう、梨吏の指定された席は、龍華の隣。

「いいじゃねえか。かわいいぜ。梨吏ちゃん。」

「そうゆう問題じゃねー。ほかの席も空いてるし。」

「ホントにわがままね。」

先生があきれたように言った。

「じゃあ、幻空さん。あっちの席に……」

「先生ッ！私……あそこの席がいいです。」

「は？何言ってる……」

リーリの方を見ると……

「ひッ！」

邪悪な雰囲気を漂わせている、リーリが。

「（なんか・・・ヤバい・・・？）」

「よろしくね？龍華。」

ニクニク。  
ニコニコ  
ニコニコ・・・。

「（こえー）お、おお。」

ーオレの学園生活は、  
どんどん傾き始めて行っ  
ているような気がし  
た。

―不思議の転校生―（後書き）

ずうずうしいですが、時間があれば、感想など・・・  
強制はけっしてしません。

―幻空梨吏と月中龍華―（前書き）

やっと書き終わった。。。

よかった！。

今回、「行がえは私のもっとつなり」を無視してます。はい。

―幻空梨吏と月中龍華―

――

カタ……。

「……。」

「龍華。久しぶり。」

「ああ。」

「龍華。知り合いだったのか？」



自分の前に座っている例の男子生徒が話しかけてきた。

(この際なので名前を發表します。中俵<sup>なかたわら</sup>くんです。)

梨吏は、にこりと笑った。

「知り合いですし・・・」

リーリがこちらを向いてきた。

「?(な、なんだあ!?)」

「恋人なんですー。」

「エッ?はあああッッッ!..?」

これには、龍華をふくむクラスの全員がおどろいた。

「（何をいつかと思ったら・・・リーリ何考えてんだあ!?!）」

「りゅっ、龍華のッ!?!」

「ま、まじで・・・?」

「梨史ちゃんがあ!?!」

「龍華にはもったいないぞ!?!」

「ひどいゆわれようだな。てか、いつとは別に・・・」

「龍華。」

「……っ。」

「（怖い。恐ろしい。笑ってるけど、目が笑ってねえ。）」

「ふふふッ。」

「くっ。」

「なんでもねえ……。」

「龍華が認めたぞッ！」

「マジだったのか……。」

何も言い返せないし。

リーリのやつ。何が目的だ？

恋人だなんて……

リーリがこっちを向いてにこりと笑った。

笑い返したが顔がひきつたのが自分でもわかる。

――――

授業中

「むー。」

少年（龍華）は、悩んでいた。

いつもは、授業中爆睡しているが、今日は寝れない。

隣がいるから・・・も、間違っではないが、詳しくゆくと、リリだからだ。

ちなみに他の人が隣だと、爆睡。誰であろうとも爆睡。

なので、クラス。いや、学年の中のやつならたいがいは、月中龍華のイメージがついている。

まずは、勝ち気で強そーな女の子を名前から想像する。

だが、龍華はまるっきりの男。これで、名前はほとんどのやつが覚える。

次に龍華は、結構顔はいい方なので、誰かしらよってくる。話してみると、普通に話す。だが、龍華から話しかけてくることは、非常にまれ。

なので、話しかけられると嬉しかったりする。

授業中は、主に寝ていて、寝ていなくてもポーツと空を見ている。だから、龍華が授業を真面目に受けているところなんて見たことある人のが少ない。

だが、なぜか成績はいいらしい。ノートは、誰かしらに借りて写すらしいが、そこも怪しい。字がきれいすぎるからだ。

先生たちも龍華にはあきれていて、気にしない。だが、昔は迷った。不良みたいに授業にでてない。問題を起こす。などなら、間違いなく退学。

だが、龍華は授業はでてる。問題を起こした訳でもない。退学には

出来ない。

かつては、先生たちが怒っていたが、提出物は出し、成績はいい。

強くは、言えない。

成績が悪ければ、

「当たり前です。授業中寝てるからですよ。」  
と言えるが、それは言えない。

などなど・・・

の理由で龍華のことは知れわたっていた。

「(くっそー。チヨーいい天気で昼寝日よりなのに。あーー。あ  
っ?)」

発見した。

リリーのピンクのラインが入ったラブリーなスクールバッグについているハートのストラップ。

赤とピンクに点滅してる。

なにかが起きそうな前触れのようだった。



## ―第2の望郷―（前書き）

またも、一週間かかりましたができました。  
ぜひ、ここまでできたら読んでください。お願いしますッ。

―第2の望郷―

「（気になる・・・でも、なんか言ったらちやちしそつだし。あー。どうしたらいいんだよー!）」

じくじく・・・。

「りーり。」

龍華は、梨吏にギリギリ聞こえるくらいの小さい声で言った。

「（これで気がついたら言おう。）」

心の中でそれを決め、リーリの返事を待った。

するじ、

「・・・なに？龍華。」

さすが、ファンタジー？と思いながら、ハートのストラップを指差した。

「あの・・・それ。」

「ん？ああ。通信か・・・さあて、どーすっかなあ。」

そんなリーリ横目でみると、

バチリと目が合った。

なんか、いやな予感がしてすぐに視線を窓の外へ向けたが

時すでに遅し。

「せんせー。」

突然リーリが手を挙げた。

突然のできごとに、他の生徒がこちらを見ている。

「なんですか？幻空さん。」

「なんかあ……龍華……いえ、月中くんが具合が悪いみたいなので……私が保健室つれていきますッ！」

前半は、落ち着いた感じで言っていたのに後半がだいぶはじけた感じに言った、リーリは、隣にいる龍華の腕をつかんだ。

「はあ！？ちょっと　まで！リっ……」

バシャンっ

言った言葉もドアの音でかき消された。

リーリとオレは、先生の許可が下りる前に教室を出ていた。

リーリの手には、ピンクのラインが入った、スクールバッグが握ら

れていた。

――

リリーに手をひかれ、連れてこられた場所はもちろん保健室……ではなく学校の屋上だった。

南皇子学園の屋上は、立ち入り禁止って訳ではない。

だが、今は授業中。

もちろん、誰もいるはずもなくそこにはただ、青い空が広がっていた。

「だれか来ないか見張ってて。」

「あーい。」

生返事を返すと、屋上のコンクリートの上に寝っころがった。

「あつたけー……。」

リーリの方を見ると、スカートをなびかせながら、屋上のさらに上、タンクの上へとはしごをつたって上っていた。

「んー。見えそつ。」

短いスカートが風になびいている。

たんつ

リーリがタンクに上りきった。

タンクの上で立っているリーリを見て・・・

「（きれいだなあ・・・。）」

と感じてしまった。

ジッと自分のことを見ていることに気づいたのか。

リーリがなびくスカートを押さえながら。

「龍華のばーかッ!!!!!!!!!!!!!!」

と大きい声で言った。

「見てねーし・・・。」

リーリには、聞こえないようにつぶやいた。



リリーは、スカートとオレ（龍華）を気にしながらタンクの上に座るとスクールバッグからやはり、ピンクのノート型パソコンを取り出した。

「（どんだけピンク好き・・・しかも学校にパソコンって。）」

いろいろ考えることはあると思うが、深くは、考えない。

今日はあつたかい・・・。

梅雨いり前の5月だ。

春・・・。

「ふう・・・。」

さっきまでぜんぜん眠くなかったのに、眠くなってきた・・・。

雨雲は存在しない理想的な晴天・快晴。

吸い込まれそうなほど青い空。

目を閉じる。

あたたかな風が体を包む。

「あッ・・・！」

リーリの声。

りりりりん

あの時間いた大きなベルの音が鳴った。

すると突然



リーリは、大きなパラソルほどのかさを肩にかけていた。

もちろんぜんぜん濡れていない。

それに比べてオレは全身びしょぬれ。

いまだにオレは雨の中。

放心状態。

起きた出来事を頭で考え中……。

で、最終的にオレがだした答えは、  
まずは屋根のあるところにGO!だった。

「ふうー。」

やっと雨から逃れられて、あと問題はこの雨とリーリだ。

「おいーリーリ。」

「なに？」

「この雨・・・リーリか？」

「ちがうし。こんなことしないよ。わたしは。」

「じゃあ、だれが・・・。」

リーリは使っていたパソコンをスクールバッグに入れて、傘を片手で持って立ち上がった。

「来るよ・・・。もうすぐ・・・。」

「エッ・・・？」

びゅゅゅゅうううー――――――。

さっきまでとは違う不気味な風が吹いた・・・。

風が突き刺さるように体にあたる。

「なんだ・・・?」

リーリのツインテールの髪がなびいた。

雨がすべてを濡らしていく。

「来る・・・か。」

リーリがつぶやいた。

タッ

リーリが右手にスクールバッグ、左手に大きい傘を持ってタンクの上から屋上のコンクリートの上に飛び降りた。

「龍華！持ってて。」

スクールバッグを龍華に向かって投げる。

「おお！・・・と。」

ボスッ

みごとにキャッチした。だてに運動神経がいいと言われているわけじゃない。

オレは、なにも言わずリーリを見つめていた。

ごくり。

びゅんぶんぶんぶんぶんぶんぶん

空中で小さな竜巻が起る。

そして、出てきた……

「……」



1 第2の望遠 21

リーリが持っている傘が光を放って、大きなクロスへと姿を変えた。

りりりん

クロスの先端についている大げさすぎるほどの大きなベルが歌った。

傘を差してないリーリに雨は容赦やじやうもなく降りかかる。

制服をだんだんと濡らしていく。

リーリは制服のポケットから、くろぶちメガネを取り出した。リーリのイメージカラーとなっているピンク色じゃない。

スチャ

メガネをかける。

メガネのレンズに文字が浮かび上がった。

「レベル4。地球への影響あり。望霊時間2週間。理由は・・・ま  
ついつか。さつきロッドが言っていた望霊だね。よっしゃー！でも、  
この大雨じゃあ詩が届かないよね。接近戦・・・ロッドが言った  
通りだ。さすがロッド良く調べてあるね。」

リーリが持っていたクロスが光りを放って形を変えていく。

「・・・あれはッ！」

リーリがそれを屋上のコンクリートに置いた。  
そしてそこにあったのは、板。

「もしかして・・・スノーボー・・・？」

そう、リーリの足元にある板は、街角の男の子達が扱っていきそうな  
スノーボーのボード。白い十字架が描かれている。

「まさか・・・！リーリがッ！で、できんの!?!？」

「さあさあ！行っちゃうからねッ！」

龍華の叫びを軽くスルーし、乗った。

ぶおおおおおん

ボードから煙がたつ。

「最新式のボードさッ！」

ボードが重力に逆らって浮いた。  
リーリはメガネをポケットにしまう。

「さあー！手っ取り早く封印しちやいますか！」

びゅううううう

風を切って望霊に近づいていく。  
すると、突然望霊が周りの雨を一点に集めていく。大きな水の塊。  
そして、リーリに向かって投げてきた。

「ハッ！？うわぁ！ちよっ、待て！せつかくの制服が濡れちゃうじやん！つてもう、君の降らした雨で結構濡れてるんだけど・・・下着まで濡れるからッ！ま・ぢ・で・・・きゃッ！」

ばっしやあああー

向かってくる水の塊と真正面からぶつかった。

今までなびいていた長いツインテールの髪も濡れてしまっている。  
だが、体へのダメージはないみたい。  
濡れるだけ・・・？

ズキンッ

急に心臓が痛くなった。正しく言つと心が痛む。

「えッ・・・？」

イメージ。

雨。

傘の下。

信号。

大きい車。

痛み。

死。。。

一気にイメージが流れた。

「……………！なにこれ……………」

リーリの頬に涙がつたう。

「望霊の思い……………」

涙は雨と一緒に流れた。

怖くて……。

悲しい……。

ずっと倒れたままでいるリーリ。

「リーリ……？」

心配だ……。何があったのか……。攻撃を受けてからぜんぜん動かない。

「リーリ！」

龍華の声が聞こえた。

「龍華……。」

そうだ……。こんなのに負けてはいけない。立てる。

自分は大丈夫だ。

悲しみに包まれていた心に光が差した。





望霊が高い音を放った。

刹那。

龍華の目の前に大きなトラックが現れた。

「えっー……。」

そして、猛スピードで龍華に向かってくる。

「えっ！りゅっ……！」

南皇子学園の屋上は他の学校と比べてかなり大きい。だが、トラックはどんとと龍華との距離をつめてきている。

大丈夫。トラックがぶつかるまでには、約10秒。それだったら十分逃げる時間はある。

だが――

「……ッ!?体が……動かない。」

金縛りにあつたみたいだ。

「くっそーッ!」

「龍華ッ!くッ……!」

リリーは動き出した。

望霊へと……。

「今、龍華を助けに行っても間に合わないッ。だったら、トラックが龍華とぶつかる前に……望霊を封印する!」

ガ……ッ

ボードのスピードが上がった。

リリーと望霊の距離は、数メートル。

この距離なら

届く。

詩を届けられる。

いける！

それと同時に龍華とトラックの距離もつまっていく。

「聴きなさいッ！私の詩を！」

ザアアアアア

雨は止む気配もない。

そこに突然流れ出したメロディ（詩）。

その流れてきたメロディ（詩）は・・・温かくて、優しい。

キキキキ・・・ッ！

トラックは、龍華にあたる寸前で止まった。

そして、龍華の目の前で

ポンッ

と弾けた。

望霊の眼から涙が溢れ出した。

「あなたの居場所は、きつとある。だから・・・もう、人に迷惑か  
けないで・・・。」

リーリの手には、自分の身長をはるかに超える大きなクロスが握ら  
れていた。

トンッ

クロスを地面に着くと、その先端についている大きさすぎるほど大  
きいベルが

りりりん

と歌った。

望霊は光を放って消えていった。

「ふうー。完了。後はロッドに任せるか。」

ちょうどそのとき授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

リーリが龍華の方を見ると、龍華はただ呆然と立っていた。

そんな龍華の姿を見てリーリがクスツと笑った。

そして龍華に近づいた。

「龍華。怖かった？」

「いや、何が起きたか……。」

「あの望霊は、ね……雨の日にトラックにひかれて死んでしまった少女の霊だった……でもこれで居場所を見つけてあげられる。」

「そっか……いいことしたんだね。」

「もちろん！私は、いいことしかしないの。ほらッ！龍華見て！」

「ん？」

そこには、さっきまでとは違う雲↑つない青い青い空が広がっていた。

「きれいだね。」

「うんッ！行こッ！龍華！」

「…！」

1 第2の望遠 31 (後書き)

「てか、服びしょ濡れなんだけど・・・？」

「着替えればいいんじゃない？」

「そうかもだけど・・・オレ、着替え持っていない。」

「あーあ。」

「あーあ。じゃないし！リーリは持ってんの！？」

「持ってるよ！もちろん！」

「オレ・・・どうすりゃいいの・・・？」

「さあーね」

リーリはいたずらっぽく笑った。

.....

ここからは、自分で物語を繰り広げてください。

ただ1つ言えるのは、確実に中俵につっこまれると思いますw。

―南王子学園の大イベント―

季節は6月。

梅雨。

雨はしとしとと降っている。

龍華は、群青色の傘を片手に歩いていた。

今日は平日。学校がある。

雨といえば、この前の”望霊”。

オレは、望霊の攻撃でトラックにひかれそうになった。

ギリギリでリーリが望霊を封印し、助かった。

だが、リーリにはまだ肝心なことを聞いていない。

それは・・・

”なぜオレを使うのか”だ。



最近では、1週間に1回のペースでバッグについているハートのストラップが光る。

そのたびにオレが具合が悪いということで保健室ではなく屋上に行く。

先生たちもさすがに怪しがるわけで・・・

「ヤバイよな・・・。さすがに。」

いきなりはないと思うが、退学もありえなくもない。たぶん。

その裏で龍華と梨吏のウワサも学校の中で有名になってきている。

梨吏が転校初日に龍華とは恋人関係。と発表したのがきっかけとなり、ウワサは学校全体に広がりつつあった。というか広がっていた。

そちらは、もうどうしようもない。

ほっとく。

そんなこんなでやってきた6月。

そして、6月の南皇子学園のイベントがある。

大のつくようなイベントだ。

- - - - -

「はアアアアアア!?!」

「みんな。それでいいよな?」

中俵がみんなに問いかけた。

「いぎなーし。」

誰かが声をあげる。

「ちよつとまって!」

龍華は、前の席に座っている中俵の肩つかんだ。

「なにかー?」

「なにかー?じゃねー。なんでオレがそんなの出なきゃならないんだよ!」

「いや、なんでって。現在、王子じゃん?」

今は、大イベントの”南皇子学園 王子選挙”に出る生徒を選んでいた。

王子になるのは、男子生徒の永遠の憧れ。  
王子になれば、モテるのは当たり前。  
それに食堂の料理は値引きされる。などなど。  
特典もりだくさん。

「王子イ!?!」

オレは、その多くの特典を使ったこともなければ知りもしなかった。  
しかもオレ弁当だしな。

「そっか。龍華休んでただっけ?楽勝だったけど?」

「なッ……。この1年間聞いたことないってのッ!!!!!!」

「まちで?オレ言ったと思うけど?龍華ボ……ッとしてたん  
じゃないの?」

たしかに、思い当たるふしがいくつか。

「今まで周りがオレの名前チョー知ってたのもこれのせい……っ  
て訳か。王子って呼ばれたこともあったよな……。」

「気づかなすぎだろwなッ?梨吏ちゃん。」

「そーですよねえ!。龍華……実は天然ですか?」

「ちげーよ。にぶい……ってか。気にしなかったのっ。」

「よしッ!じゃあ、やっぱり龍華が候補者でいいと思いますッ。」

中俵が教室にいる生徒全員に聞こえるように大きいこえで言った。

「なんで、そーなるんだよ……。」

龍華が机にひじをついて、その手のひらの上にあごをのせた。

「龍華は、現在王子だってわかったんだからやるっきゃねえだろ。」

「めんどくせー。中俵やればいいだろ・・・。」

「バカ言つなーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!オレ  
がでたらどーなるか、めに見えてるっつもの!ブーイングのあらしだ  
つてのッ!」

中俵大きい声で叫んだ。

廊下まで響きわたる。

「龍華。謝った方がいいんじゃない?」

リーリが耳元でささやいた。

確かに、オレもそう思った。

「悪かった。うん。だから、おちつけ?」

「龍華出るよ?出て2年の王子の座を奪うんだーーーー!!!!フォロ  
ーはオレにまかせろー!」

「は……?」

「みんなー!はくしゅー!」

パチパチー

「ちよつとまてええええ!」

時すでに遅し、

乗せられた……と思いながらも

月中 龍華。 出場決定。

さて……王子の座はだれのものになるのやら

ーファンタジーー（前書き）

祝！ファンタジーの詩10話目！！！！

「ファンタジー」

.....

「リリー。」

「ン？何？」

「どうして・・・オレなの・・・？」

帰り道。聞いてみた。気になっていたこと。

”なぜオレを使うのか？”って。

会話だけ聞くと恋人同士みたいだ。

「龍華は・・・巻き込まれて嫌だと思ってる・・・？」

質問を質問で返された。

でも、



「オレは、別に・・・良いんだ。嫌じゃない。って言っても、望霊。2回しか見てないんだけどさ。」

これだけは、はっきり言える。

不思議なことに巻き込まれた。

でも、これを1度も嫌だ。と思ったことはない。まだ2回だけだが。

逆にワクワクしている。暇で暇でどうしようもなかった人生に終わりを告げている・・・そんな気がした。

「じゃあ良かった。」

リーリは笑いながら龍華の目の前に出た。

「教えてあげるツ！なぜ龍華を使うかっていうと・・・」

「言っと・・・?」

「パートナーだからだよッ！」

リーリの口から予想もしない言葉が出てきた。

「へ……？パートナー？」

「うん。龍華に望霊を封印する仕事を手伝ってもらおう私のパートナーにすることにしたんだ。だから言ったでしょ？決めたって。」

思い出した。きっと、初めて会ったとき別れ際に言ったときの言葉。

”決めたから。”（第3話参照）

「え……あっ！あの時の!？」

「そう。龍華をパートナーにしようと思って、それから龍華が通っている学校に行こうって決めたワケ。だから……これからもよろしくね!」

「もちろん。」

リーリはニコニコと笑った。裏表のない笑顔。

つられて笑った。今回は、自分も上手に笑えた気がした。

あこがれていたファンタジーの世界は、現実とつながっていた。

兄ちゃんにも・・・ファンタジーを見せてやりたかった。

「今じゃあ、叶わないけどな・・・。」

笑顔が消えて、小さくつぶやいた。虫の泣くような声で。

さすがにリーリにも聞こえなかったようだった。

―大イベント紹介と新たな敵―（前書き）

ただただ、スミマセン。



「いや、はりきりすぎだ……。朝からつつせえ。」

「大船に乗った気持ちでいてくれていいからな！」

「沈みそうだな。あっけなく。」

「オレの船がかあ?!」

「それしかねえ……。」

「沈まねーよ。しっかりしてるから。」

「さあ?どうだかなー。」

適当に言葉を返して、机にふせた。

「(眠い……)」

「中俵くん。王子選挙ってなにをするの……?」

ふせた龍華のかわりに龍華の隣に座っていた梨吏が会話に入ってきた。

「そつか。梨吏ちゃんは知らないか。王子選挙つてのは、この学園の大イベントの1つで3日間に亘って行われるんだけど・・・その3日間で1日目がスポーツで勝ち抜き戦。その一位、二位、三位が準決勝進出。投票で一人が落ちて二人が決勝。決勝は、一番の盛り上がりを見せるファッションショー。その後、生徒の投票で決まる憧れるよなー。王子。」

「普通の人じゃなれないの？」

「うーん。毎年あるにしても、そうとう難しい。2年には龍華。あと、A組の

媛森 飛鳥

が今年はいいせん行くんじゃないか？王子選挙初の1年もほとんど候補ぐらいは決まってるだろうからな。」

「そつかぁ・・・ある意味才能だね。」

「そーだよな。でも、王子になったら女子はいいが男子からは、少しは絶対嫌われる。自分たちが投票してくせになあ。まあ、一番になるのも大変なことだよな。」

「それって……龍華も？」

「龍華は……別だな。ある意味。龍華を嫌ってるって奴はまったくと言っていいほどいないだろう。まあ、あの性格だし。それに龍華のお兄さんは……」

ガラガラっ

ちょうどその時、先生が教室に入ってきて中俵の言葉を打ち消した。

「また後で話すね。」

そう言って、中俵は前に向き直った。

「うん。」

梨吏がふと、龍華を見た。

龍華は机にふせて寝ている。



「すーすー。」

静かに落ち着いた寝息をたてている。

「龍華のお兄さん……か。」

梨吏の咳きは、誰にも伝わることではなく、空気に溶け込んでいった。

.....

長身の女性の影が2つ。

まわりは暗黒色で影が白く映し出される。

「月中 龍華。なかなか、かつこいいじゃない？」

「バカ言わないで・・・そっちじゃない。私たちの目的を忘れたの？」

「ふふふ。分かってるわ。目的は・・・」

暗い真つ黒な世界が揺らいだ。

「メルヘン・ドゥーバルト・ザ・リーリの魂（命）でしょ？」

そして、怪しげに、にやりと笑った。

もう1人は真剣な眼差しでもう1人をみつめた。

「でも・・・龍華くんを使った方が楽しいわ。ね。あなたもそう思うでしょ？」

そこには、今まで話をしてきた2人のほかにもう1つ。少年の白い影があった。

「はい。」

表情では何を考えているのか分からない。

「たのんだわよ。たくさんの霊があなたに従おうとしている今、あなたは無敵に近い。」

「絶対に……リーリの魂を奪って見せます。」

なにもない真つ暗な空間を睨んだ。

少年は、初めて感情を見せた。

また……世界が揺らいだ。

12 龍華のお姉さん(前書き)

いやー、、、すみませんでしたっ!!!



「やめよ。考えたくない。」

静かに呟いた。

今、梨吏と龍華は中俵が会議を開こう！と突然言い出したので放課後しぶしぶ会議を開くという教室に向かっているところだった。

「ほんと。無駄なことするよな。」

他の生徒は部活。本当なら帰宅部の龍華はとっくに帰ってる時間なのだが、中俵が準備があるとかで30分ほど待たされた。はっきり言って、途中帰ろうかと思った。

「ふああ……。寝みー。」

あいかわらず睡魔が襲ってくる。

「龍華。寝不足？体に悪いよ？」

リーリが自分の顔を見つめた。

「まあ、家で色々あって・・・てか、ほとんど毎日なんだけど。姉ちゃんが……………!!!」

言葉が途中で途切れた。来たからだ。

本人がツツツ！つまり姉がツツツ！

前から歩いてくる。見間違えるはずも無い。だって毎日会ってるし、それに女子の平均身長をはるかに超える長身とスタイル抜群のルックス。黒くきれいなセミロングの髪が歩くたびに揺れている。

南皇子学園の憧れの先輩ナンバー1に輝いた

つきなか  
月中 華花

オレの姉ちゃんだ。そして、寝不足の原因。

できればすれ違いたくはないがこうなったらしょうがない。覚悟を決める。

前を向くとすでにそこまで姉がやって来ていた。



「あれ？」

今まで姉を気にしすぎて見てなかったが、隣には2年の媛ひめもりあすか森飛鳥がいた。

姫森飛鳥といえば王子選挙の優勝候補。女顔で家が華道、茶道を教えている和の雰囲気漂う由緒ある家柄らしい。

そんな奴がなぜ姉ちゃんの隣に？と思ったがそこは龍華。軽く流す。

そして、今、そんな姉の横を通り過ぎようとしていた。

そう、ことはうまく行く予定であった。

だが、

「うおっ！」

派手に転んだ。もちろん。転ばされたのだ。姉ちゃんに。うまく廊下で受身を取り、なんとかケガは防いだ。

斜め上を見ると転ばせた張本人は腹を抱え笑っている。

「姉ちゃん!」

ひどい姉だ。と思うがそれを言葉に出すことはしなかった。

「はははッ!おっかしいー!いいこけつぷりだったぞ!弟よ!」

「大丈夫?龍華」

リーリが心配して上から声をかけるが、その顔はどこか笑い出しそうになっていた。

「わかってるだろうけど、あたしの弟」

姉ちゃんが隣にいた飛鳥に言った。

「はい。たしか、月中龍華くんだけ?話すのはこれがはじめてだよね。宜しく」

飛鳥が転んだままの龍華に視線を合わせるようにしゃがみこんだ。そして、左手を前に出す。

「ども」

軽く返事をし、右手を飛鳥の左手に重ね合わせる。

飛鳥がにこりと微笑んだ。

「噂どおり美少年だね」

「は、はい？」

考えもしない言葉に少し困った。

姉ちゃんの声の上から降り注いだ。

「龍華ー。この子が噂の彼女さん？」

姉ちゃんがリーリをなめ回すようにみていた。

「姉ちゃん。あのっ」

「はじめまして！先輩！龍華くんとお付き合いさせていたただいてますっ！幻空梨吏です！」

深くお辞儀をした。長いツインテールの髪が揺れる。

「かつ！！！！！！」

「えっ？」

「かわいいっ！お人形さんみたい！」

突然抱きつかれ、さすがのリーリも戸惑っていたのがわかった。

「ふえッ！ええ？！」

いつもは何でも無関心な龍華だが、さすがにこれは自分が招いたこと。ほっとくわけにはいかない。

「姉ちゃん！」

この際、飛鳥くんには少し待ってもらおうこととして立ち上がり、姉ちゃんを止めに入る。

その時、

「あれ。華花先輩？」

聞き慣れた声が近づいてきた。

「中俵くんだっけ？」

「はい。こんにちは。いつも龍華にはお世話になってます」

リリーを開放し、中俵に向き直る。

「大丈夫か？」

「驚いただけだから」

横目で中俵ナイス！思いながら何がなんだかわからなくなってきた。

とにかくこの場からいなくなった方がいい。と思う。

「ああ！そうだった！龍華！会議。梨吏ちゃんも早く。先輩！それでは。失礼しますっ！」

ほら、はやく。と呟くと

梨吏と龍華の手を引いて目的地に向かっていった。

その後ろにむかってひらひらと華花が手を振った。

「あの子が・・・メルヘン・ドゥーバルト・ザ・リーリか」

姫森飛鳥は呟き笑った。

「龍華の意外な才能!?!」

「ふぁー……」

シャーペンを立ててクルクルと器用にまわしながら大きなあくびをした。

カンッ

という音をたててシャーペンが手から離れた。

「だからー!てか、龍華聞いてる?」

中俵が声をあげて自分の名前を呼んだ。

「え?ああ、何?」

「は?!まさか、最初っから聞いてないとか言わないよな……?」

中俵が眉をひそめて自分に聞き返してきた。

「聞こえてた……けど、何にも覚えてないな」

嘘をつくのもガラじゃないのはつきりと言った。

「まじかよー！」

ものすんごく驚いた表情を見せるが「ま、龍華だもんな。仕方ねーよ。うん」とすぐに納得している。

月中つきなか 龍華りゅうかはそついう奴なのだ。

ここで激怒すれば「あっそ。じゃっ、オレ帰るわ」と返される。龍華といい関係をきづくにはとにかく、心が広くなければならない。

という説明だけしておく。

「こらっ！龍華！龍華はナンバー1になれる実力があるだから頑張りなさいよお！」

リーリがそんなことを言い出し、横目でリーリを見て見る。

「眠いんだよー」

最後の方はため息交じりで言った。そして、机に沿うようにして手を伸ばした。



「龍華ー！」

突然、リーリが龍華の肩をつかみ、龍華の体をちゃんと起こした。

「な、何？」

そして、両肩をつかみながら龍華の顔をジッと見つめた。

そして・・・

ポケットからハート型のついたピンを取り出し、龍華の前髪にとめた。

「龍華かわいいっ」

「はぁあ？なんでこんなの・・・」

龍華が片手で取るうとする。

「ああ、おっと！はずさないで」

それをリーリが阻止した。

「なんで・・・」

ガラッ

「中俵！やってるー？」

突然ドアが開き、屋台に入るノリで女子学生が入ってきた。

「菜冬。やってるやってる」

都張とばり 菜冬なふゆ

クラスメイトで中俵の隣の席。

中俵の幼馴染。

そして、龍華の大ファン。

ちなみに、女の子っぽいこのならほとんど出来る。

「菜冬ちゃん！見てみて！」

「リーリやめろっ」

「なにー？」

菜冬がリーリの席までやって来た。  
龍華の顔をのぞく。

「かわいいでしょ？」

なぜか、リーリがえばったような口調で言った。

「なんで、リーリがえばるんだよ」

「だって、龍華の新たな才能を発掘したじゃん」

「才能って」

あきれたように龍華が言った。

菜冬の体がプルプル震えて、それに気づいたリーリが顔を覗き込ん

だ。

「菜冬ちゃん？」

問いかけても返事がない。

龍華もさすがに不思議そうに菜冬を見た。

「都張？」

そして・・・

「チョーーーーーーっ！……！……！かわいいよ かわいいすぎるよ、  
龍華くん！……！」

完全に目がハートだ。

「はっ？」

「でしょー？チョー美少女でしょ？」

「いやいや、ピン1つでそんなに変わるわけないだろ」

「まさかのビフォーアフターだよ」

リーリがはやし立て、菜冬がうなづいた。

「どれどれ？」

中俵が気になって近づいてきた。

「まじだ・・・」

「はあ？」

「手や足は白くてほっそり。鼻は高くて顔が整っている」

中俵が片手を口元にもってきて険しい目つきで龍華を見た。リーリと菜冬はそんな、中俵を横目で見ていた。

「何解説して・・・」

ガシッ

龍華が何か言いかけた。

だが、中俵が勢い良く両肩を掴むのでそれも途中で終わった。

龍華が少し引いた目で中俵を見る。

「お前は天使の生まれ変わりなのかもしれない」

真面目な顔で言った。

「何言ってるんだ？」

バカかとも言うつようにというが、目で言った。

だが、菜冬が拍手をしてみた。

パチパチ

それを見て、リーリも拍手をしてみた。

まるで、おお！確かにその通りなのかもしれない！とでもいつよう  
な拍手。

龍華がきれいな顔を引きつらせた。

「そんなわけないだろー！ー！ー！！」

この物語の主人公。

月中龍華の叫びは学校中に響いたという。

―龍華の意外な才能!?!― (後書き)

おわりがあるのか？

というぐらい物語が進んでません (笑)

頑張りますツツツツ!!!!!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5880j/>

---

ファンタジーの詩

2010年11月15日10時23分発行